クローバー（２）

ディライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クローバー（２）

【Ｎコード】
Ｎ４２６７Ｚ

【作者名】
ディライト

【あらすじ】
あれから２ヶ月。奇妙な同居生活もすっかり落ち着いた草野春樹と碧原一葉、二葉、三葉の４人。騒がしくも平穏な毎日を取り戻し、有意義な日々を送っていた春樹だったが、それは長くも続かないようで・・・。クールなクラスメイト花咲嘉穂に惑わされたり、同居バレ恐怖のゲームパーティーに、二葉にまさかの求婚者が現れたり・・・！相変わらず春樹の周りは慌しい。
ああ、俺の平穏な日々が・・・。日常ホーム&ラブコメディ、クローバーシリーズの第２弾！

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

どうも、ディライトと申します。クローバー（１）のつづきとして（２）をスタート致します。前回の小説を読んでいただけた方、本当にありがとうございました！（２）をクリックして頂けた方、完結済みである（１）の方から読んでいただけるとお話がわかります。今回も遅筆ながらのほほんと書いて行きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
だいたい全１０回を予定しており、１回が約７０００字～８０００字くらいです。
こんな小説ですが、感想評価などいただけた日には、できもしないバク宙をやっちまうぐらい喜びます。
では、今回もよろしくお願いします！

クローバー（２）スタートです！

Prologue

クローバー（2）

Prologue

6月の初め。季節は春の色を消し落とすべく、長きにわたりじめじめとした雨を降り注がせる。
夏の訪れを感じさせ、傘が手放せなくなるこの頃、新しいクラスの面々にも違和感を感じなくなり、平和と怠惰を心から愛する俺、草野春樹（くさのはるき）はようやく平穏という宝にありつけていた。

4月のあの出会いから、俺の生活は一変した。
俺の悩みでもあるにっくき栗色髪がたまたま学校一の御令嬢美少女、碧原一葉（みどりはらひとは）と同じだったことで、俺は彼女とニアミスしてしまった。
その事をきっかけに、なんの因果か一葉のアパートの火事現場に居合わせた俺は、一葉とその妹二葉と三葉を匿ったことで、俺達は辛くも同居生活をすることとなった。
そのことで、色々問題もあった。
2ヶ月経った今でもこの事は内緒であるし、親しい友人に嘘をつき続けている罪悪感もある。同級生の男の家に居座ってるなんてのも大問題だ。でも俺は、俺の我が儘で、彼女達に残ってもらう事にした。土下座までして。本当にどうかしていたとは思う。平穏を愛する俺が、まさか自分から泥沼に足を踏み入れたんだから。でも、そんな泥沼で遊んで泥まみれになるのも悪くない。それは一葉と出会ってから身を以って知ったことだ。

――――ッ！！？

突如腹の辺りに感じる重みと痛み。
2ヶ月前の走馬灯がぐにゃりと形を成さなくなる。
「ハルキハルキ！もう朝だぞ～！」
重たい瞼を持ち上げて、腹の辺りで馬乗りでゆさゆさと俺を揺らす
その姿に眼を凝らす。
「・・・ん、フタバか・・・・・・」
薄い水玉模様のパジャマ姿に、空も飛べそうな寝癖のついた栗色シ
ョートカット。小学6年生にしては無邪気すぎるテンションに、整
いすぎている顔の造形は妙に似つかわしいようにも感じる。
「もうご飯できてるよ！」
朝から直射日光のような笑顔を向けるのは碧原家次女二葉（ふたば）だ。首を
傾げながら布団に収まる俺の上で横揺れする。
「・・・へ？なんで？」
あれ、今日は朝飯当番は俺のはずだし、というかなんで二葉が起こ
しに・・・。
俺ははっと気づいて、首だけ回して目覚まし時計に眼をやる。
その時計は無情にも3時23分を指したところで時計としての仕事
を放棄して眠りについていた。
「うおおお！？時計止まっとる！？」
「わぁ！」
俺が慌てて起き上がったために、俺に乗っかっていた二葉はころん
と後転する。
「だいじょうぶ！ヒトハが作ってくれたから！」
「え、マジか！？」
側にあった携帯で時間を確認する。学校には十分間に合う時間だ。
こういう時のために少し早めに起きるようにしている。俺は一先ず
ホッと一息ついて布団から出る。しかし、一葉がいなかったら朝飯
は抜きとなっていたことだろう。

「――っと」
俺は思い出したように、俺の隣で今だ眠り姫のように眠りつづけている少女に目を移す。
「ミツバ、朝だぞー」
横向きで幸せそうに寝息を立てている彼女は碧原家三女三葉(みつば)だ。「――――・・・・ん・・・・・・・」
穏やかな表情から一転して、顔をくしゃっとさせて身体を起こす三葉。
「・・・・・・・・・おはよ・・・・ハルキ」
三葉は囁くように静かに微笑む。起き上がると同時に薄い桃色のパジャマが見える。寝起きのため、今は背中越しまで流れる綺麗な栗色髪だが、普段は束ねて右肩に下げるサイドポニーテールにしている。姉に同じくして整いすぎている顔の造形に、小学４年生とは思えないほど落ちついている大人しい娘だ。
「おはよミツバ。ヒトハが飯作ってくれたみたいだから、着替えてこい」
「・・・・・・うん」
ゆっくりと布団から出ると隣の空き部屋を宛てがった碧原三姉妹の部屋へと引っ込んだ。
「もー！ミツバのヤツすぐハルキの布団に潜り込むんだ！」
二葉が腰に手をあてて頬を膨らませる。あの風の強かった夜を境に、三葉はよく俺の布団に潜り込んでくる。了解を得る場合もあれば、朝起きるといつの間にという事もある。気付かず寝返りをうって押し潰してしまわないか懸念しているところだ。
「まぁいいじゃんか。なんならフタバも一緒に寝るか？」
俺が何の気なしに問うと、二葉は俺の布団をちらりと見て、すぐに顔を赤く染めた。
「ね、ねないよ！これでももう６年生だし、来年は中学生になるんだぞ！そんな子供っぽいことできないよ～だっ！」
べーっと舌を出した後、ついっとそっぽを向いて二葉も着替えるた

めか、三葉にあやかるように部屋へと消えていった。二葉の方がよほど子供っぽいぞと言ってやりたかったが、ぎりぎりのところで飲み込んで苦笑した。
そんな二葉を見送って、俺も自分の支度へ取り掛かる。といっても布団を畳んで後は着替えるくらいしかないのだが。俺はさっさとブレザーだけを抜いた制服姿に着替えて居間キッチン兼用スペースへと向かった。
「あ、ハルキ寝坊！」
部屋を出ると、ちょうど朝食のスクランブルエッグをテーブルに運んでいるエプロン姿の女子高生がいた。
「わ、わるい、目覚まし時計が止まっちまっててさ・・・」
俺はぷらんと摘むように、寝坊の原因を作った犯人を見せ付ける。
「もう・・・私が起きなかったら完全に遅刻だよ？」
お母さんのように口を尖らせて、俺を上目遣いで睨む。はっきり言えばまるで怖くないどころか俺の中の可愛い表情ランキングベスト3に入るだろう彼女の表情だ。ちなみにあと二つは・・・まぁおいおい教えてやろう。
制服にエプロンという格好で頬を膨らませているのは、碧原家長女一葉（ひとは）だ。誰もが振り向く美貌を欲しいままにしている彼女は、俺と同じ学校に通う同級生。枝毛一つも見当たらないような腰辺りまで流れる綺麗な栗色ストレートヘア。何の汚れも知らないような瞳とその宝石を守るような長い睫毛。滑らかな曲線を描く鼻に、桃色の弾けるような、それでいて柔らかな唇。そして美人というだけに留まらせない、幼さも残すふわりとした輪郭に、女性の中でも小柄な体躯はそれをさらに際立たせる。しかし出るところはきっちり出ているといったように、これ以上を求めようのない総てを手に入れている彼女こそ、碧原一葉その人である。しかし、それでも天は二物を与えないらしく、一葉は学校では近寄りがたい御令嬢という不名誉かつ理不尽なレッテルを今でも貼られている。まぁ色々原因があるのだが、いまだ解決するに至ってはいない。俺達と友人として付

き合うようになってからは、以前よりはだいぶ良くなったと思うが。そのため、学校での友人はあまりに少ないのだ。でもいずれこれについても俺が解決してあげたいと思ってるのだが、いかんせん俺も社交的な性格でないため、期待薄である。

「ほら、寝癖直して、はやく食べよ？」

「おう」

同居生活を始めて早2ヶ月が過ぎ、俺達のこの生活の中でもはや遠慮という2文字は完全に消え去ったと言ってもいい位まで落ち着いていた。あの時の選択はやはり間違っていなかったのだ。そのお陰で今の平穏な生活がある。そして俺はこの素晴らしい現状を大事にしていく。そう心に決めたのだ。

◇◇◇

――――ルキ――――！クサノハルキ！

拡声器のような音量で俺の名を叫ぶ方角へと突っ伏していた顔をあげる。

「草野～！お前はなんで朝のホームルームから爆睡状態に入っているんだ？」

視界の定まらない眼を凝らすと、白いタンクトップに青ジャージの体育会系マッチョマン、我が2－D担任岩崎勲夫（いわさきいさお）（だが担当数学）教諭が、持っているチョークを今にもやり投げの如く投げ付けようとしているのが見える。

「・・・んあ、すんません・・・・・・」

周りを見渡すと、見慣れたクラスメート達のクスクスと笑う姿。俺の席は一番後ろの中央で、どうやらタッパのある岩崎教諭からは丸

見えらしい。一番前の席では、列の人の横からひょっこりと顔を覗かせて笑いを堪えている一葉の姿もある。
岩崎教諭は、仕様がないなと言った感じに大きく溜め息をつくと、すぐにホームルーム終了のチャイムが鳴り響いた。

「ハルっちゃん～、今日は一段と眠そうじゃん？どったの～」
チャイムと同時にクラスメートが掃けると、それと同時に腐れ縁、筑紫正志（つくしまさし）がチャラ男全開の笑顔でやってきた。筑紫は、俺よりさらに明るめの金髪に近い茶髪のトップを立たせて、片耳ピアスにおしゃれな黒縁メガネをかけている。そして首周りにはいつも欠かさず身につけている、6月ではそろそろ首もとが蒸れそうな長い紫色マフラーを巻いている。登下校時には特大のヘッドホンとスケボーを相棒にする正真正銘のチャラ男である。
「昨日夜中にな・・・・・・」
俺は前の不在の席に座った興味津々な筑紫に、眠そうな眼を向け答えようと口を動かしたが途中で止めた。
「なになに！？気がつくと隣に美少女でもいたってか！？」
アホさ満載な発言をする筑紫だが、実はあながち間違いでもないため、俺は少々肩をびくつかせる。
時計で確認したときは1時半過ぎだっただろうか。三葉が俺の部屋の襖を開け、そのまま真っ直ぐに俺の布団内へと侵入を図ってきた。昨日はたまたまその時に起きていたせいもあって、三葉が気になって完全に寝不足である。三葉は完全に寝ぼけていたらしく、俺の背後へ回ったと思ったら、何を勘違いしたか俺を抱き枕と認識したらしく、俺の背中にかなり長い時間腕を回していたのだった。
「アホか」
といってもそんな事実を簡単に口に出せるわけもなく、親友の妄言は妄言のままでうっちゃる。
そんな冷たい俺の言葉に、筑紫はまるで可愛くないうるうるとした瞳を向けるが、俺は気付いていないようにそっぽを向いた。すると

その視線の先にもう一人の親友の姿があった。
見上げると、いらっとするほどの爽やか笑顔を振り撒いて、佐久間恵介(さくまけいすけ)がこちらにやってきた。
「ハルキ今日も眠そうだな」
アホな親友と発言レベルが同じな佐久間だが、その正体は学校の女子生徒のアイドル的存在。大人しく見せる黒髪無造作ヘアーだが、整った顔にどこぞの芸能人的愛想。学業優秀、スポーツ万能。もう描写するのも馬鹿馬鹿しくなるほどのイケメンのお手本である。
「お前ら俺を描写する時絶対に『このいつも眠そうな———』から入るだろ」
「？なんの話だ？」
「何でもない。こっちの話だ」
いつもの眠そうな眼で筑紫と佐久間を睨む。
「ねね、ハルっちゃん！近々ハルっちゃん家に行っていい？」
「はぁ！？な、なんで・・・？」
急な筑紫の発言に思わず声が上擦る。閉じかけていた眼もついつい開く。
「だってさ、2年になってから全く行ってないじゃん？おばちゃんにも挨拶したいし、つかハルっちゃんちにあるＷｅｅが面白すぎてちょくちょく通いたいくらいなんだよ！」
「ああ、あのテニスのか！面白いよなあれ」
佐久間も同調する筑紫の言うＷｅｅとは感応型コントローラー対応のゲーム機である。そういえば押し入れにいれっぱなしですっかり忘れてたな。今度四人でやろう。二葉と三葉喜ぶぞきっと。
「というわけで、今度俺らを楽しませてくれ」
お前らは喜ばんでいい。
「ナニナニッ！？なんの話してるんだい？？」
三人でだべっていると、話が聞こえたらしいクラスメイトにして一葉の唯一の親友である枝村葵が、跳ねるようなステップで俺の背後から顔を覗かせる。彼女はとにかく元気印。肩まで伸びる薄茶色の

髪の毛に前髪を留めるための青い髪留めがトレードマーク。大きな瞳に猫のような特徴的な口角。美人というよりも可愛いらしい仕草の多い、明るく笑顔の眩しい女の子である。
「おはよアオイちゃん、Ｗｅｅって知ってる？」
筑紫が後ろで俺の両肩に手をかけている葵に問い掛ける。
「おはよ筑紫クン！ゲームだよねっ！あのＣＭでやってるやつ！」
葵がスカートを翻しながら、見えないテニスラケットを振る。
「そそ、それが何故か一人暮らしのハルっちゃん家にあるんだよこれが！」
「マジかい！？そりゃすごい！」
大袈裟に驚いて持っていた透明ラケットを放る葵。
「なんかの抽選で当たったんだよ」
筑紫め、余計なことを。この流れだときっと・・・。
「よし！じゃあ今度ハルキんちに皆で集まるか！」
佐久間が何かいいことでも思い付いたように立ち上がって提案する。
サクマこら！お前サクマじゃなくてアクマだろ！？
どう考えても俺を陥れようとしているとしか思えないぞ。
「いやいやいやいや！無理だって！俺の部屋に８人も人が入るわけねえよ！」
「８？春樹と筑紫と俺と枝村と碧原と花咲で６人だろ？それぐらいなら大丈夫じゃないか？他にも誰か仲良いやつでも呼ぶのか？」
佐久間は指で数を数えながら首を傾げている。焦って口が滑った。つい二葉と三葉がいる前提の話をしてしまった。というか呼ぶのかってもううち来ることは確定かよ！？
「ちょ、待てって！俺の部屋汚いし、女の子をそんな部屋に入れるわけにはいかねえだろ！？」
俺は半ば必死になって反論する。実際は綺麗好きな一葉が隅々まで掃除してくれているので足の踏み場もないなんてことはない。
「あたしはあんまり気にしないよ？」
「俺！俺が気にするの！」

気にするのは同居バレについてだが。
丁度俺が涙目で訴えている時に、天使の鐘が鳴った。１限開始のチャイムである。
おし！このままこの話はうやむやにしちまえば大丈夫だ！
「げ、授業だ・・・」
「うーん、残念」
「じゃあハルキ、来週までに部屋綺麗にしといてくれよ！」
「おう！まかせとけ・・・ってはぁ！？」
口々によろしく～やらまかせた～など人の気も知らない無情な言葉を残して、各自自分の席へと戻っていった。
まずい。もう全く断る理由が無くなってしまった。実際一人暮らしのやつの家なんて友人にたむろしてくださいお願いしますって言っているようなもんだからな・・・。
しょうがない。次の英語の授業は俺のあまり思わしくない頭を存分に捻って代替案を考えることにする。
また面倒ごとが増えてしまった。

◇◇◇

午前中の授業はうんうんと唸りながら必死に解決策を考えていたために、授業内容などは耳から耳を光速で通り過ぎてしまった。ただ先生方からは、考えている姿が勉学に意欲的であると見なされたらしく、何度か名指しで褒められてしまった。まさかこんな不純な考えに浸っていたとは口が裂けても言えない。
昼休みは2年になってからのお馴染みの面子、一葉、葵、花咲、筑紫、佐久間と昼食をとったのだが、ここでも佐久間が余計なことをしでかしたために、来週の日曜日はハルキんちでＷｅｅパーティーをするぞー的な流れにしやがった。そのため、一葉から「大丈夫な

の？」と「あとで話聞かせてもらうから」のありがたい目線を頂くこととなった。

そして昼食を終えてからは結局思い浮かばなかった解決策を、往生際悪く頭だけ机に載せて必死に考えている。

「日曜日楽しみね」

ハスキーな声で囁くように言って、俺の前の不在の席に腰を降ろしたのは花咲嘉穂（はなさきかほ）だ。

クールで知的な表情で妖艶に微笑する彼女は、胸辺りまで伸ばす黒髪を毛先でカールさせてふわりとした印象を出させる。それでいて凛と主張させる眉と奥二重の瞳、すっと伸びる鼻に、小さな唇。少々Sっ気がありそうなその表情も相俟って、まさしく美人といっても差し支えないだろう。スタイルもよく着物がよく似合いそうだ。

「全然楽しみじゃねえ」

俺は顎だけ付けて顔をあげながらむすっと答える。

「あら、何故？男の子3、女の子3。言ってしまえば合コンよ？」

「・・・お前わかってて言ってんだろ？」

「ふふ、何を？」

悪戯に笑ってごまかす花咲。

そう。何故かは今だに知らないが、花咲は俺と一葉の関係について、何やら色々と知っていそうな節が多々あるのだ。

4月に一葉との同居生活問題を解決した。その時、一葉を助けるために花咲は俺にどうすべきかを気付かせてくれた。事情も知らないのに。その前のショッピングモールハナオカでばったり出会ってしまった時もそうだ。いくら二葉と三葉を見たからと言っても、同居がばれないよう気をつけろと釘を打ってきたことは気になっていた。そして俺は問い掛けた。一度は交わされた質問をもう一度振ったんだ。

『お前は俺と一葉のこと、どこまで知っている？』

と。花咲は少し思案するように歩を進めた後、真っ直ぐ俺を突き刺すような目線を俺に向けて、振り向きざまにこう言ったのだ。

『――――知りたい？』

と。俺の答えはイエスだった。
しかし彼女は俺の求めている答えをくれなかった。
音も立てずに口角をあげ、そして、

『――――そのうちわかるわ』

と、最後は花咲に似合わない満面の笑みをくれたのだった。

「花咲・・・もう2ヶ月経つんだぞ。そろそろ教えてくれたって罰は当たらないんじゃないか？」
「もう2ヶ月も経つのに、相変わらずあなたは私を名前で読んでくれないわよね」
少し口を尖らしながら、毛先のカールを弄る花咲。
「じゃあカホって呼べばいいのか？」
「なんか私が強引に呼ばせてるみたいでヤね」
「実際呼ばせてるだろ」
花咲は座りながら足をぷらぷらさせている。
「なんか距離感じるじゃない。――――一葉も・・・葵ちゃんも名前で呼んでるのに」
ふいにそっぽを向いてそう呟く花咲。巻き髪だけしか見えなくなり、表情は伺えない。
「ん～、まぁそうだなぁ。でも慣れちまったってのもあるからなぁ」
「そうじゃないわ」

「ん？何が？」
花咲の発した言葉の意味がよくわからず聞き返してみるが、花咲は首を横に振った。
「何でもない」
よいしょと零して、席を立つ。
「ふふ、日曜日あなたがどうでるのか、楽しみにしてるわ」
意味深に微笑んで、花咲は一葉と葵の元へと戻って行った。
やっぱりあいつ絶対に何か知ってるだろ・・・。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ―完

第1章―（1）

第1章―（1）

「どうしてこうなったの！？」
木曜日の放課後、いつもの買い出しから帰ってきてすぐに、緊急会議が開かれる。勿論内容は、日曜日に草野春樹宅に友人が遊びに来てしまうという、本当なら楽しみにしていていい筈のイベントについてだ。
「いや、なんというか流れで・・・」
「どんな流れよ、どんな！」
一葉がかなり困ったように頭を抱えながら、不用意な約束を取り付けてしまった正座で反省中の俺を睨む。
気まずくなって目線を逸らすと、二葉と三葉は夕方のアニメに食いついていて、我関せずを貫いているが見える。
「筑紫のアホが急に俺の持ってるＷｅｅをやりたいとか吐かしやがったから・・・」
「筑紫クンのせいにしな・・・ってそういえばハルキＷｅｅ持ってたの？」
怒った表情から一転、はっとしたように驚きの眼を向ける。
「お・・・おう、前に雑誌の抽選に応募したら当たったんだ。コントローラーもちゃんと４つついてる」
「ホ、ホントに！？わぁ～私一回やってみたかったんだよね～あれ！」
頬に手を当てながら、見えないコントローラーを手に腕を振る一葉。喜ぶのも無理はない。このＷｅｅという次世代ゲーム機は発売から半年が経つというのに、今だに手に入れるのが困難というほどの超人気ハードなのだ。一挙手一投足を覚えてしまうほどにＣＭを流している癖に、在庫切れの連続で「これはあるある詐欺だ」なんて言

われているほどだ。
俺は立ち上がって、Ｗｅｅが封印されているだろう押し入れを漁る。
「確かこの辺に・・・」
「あのＷｅｅをこんな汚い押し入れに閉じ込めておくなんて・・・。ハルキは今全世界のゲーマーを敵にしてるよ」
「んな大袈裟な。・・・お、あったあった」
殆ど使っていない、パッケージの箱そのままにＷｅｅは押し入れの奥で横たわっていた。確か以前１、２回筑紫と佐久間がうちに来てやったきりだな。
「ほとんど新品同様じゃない。こんな面白そうなのなんでプレイしないの？」一葉が埃を被っていただけのほぼ新品Ｗｅｅを見て零す。
「確かにこいつは時間も忘れるほど楽しい、今までにない画期的なゲームだ」
「ならなんで？」
「多人数ならな・・・・・・アパートの狭い一室、夕方一人で架空のテニスラケットを振っている俺の姿を想像してみろ」
俺に言われると、一葉は首を傾げて下唇に人差し指を添えながら考えるポーズ。３秒ほど思い浮かべた後、何かを察したように眉をひそめた。
「・・・そもそもハルキが運動してる姿を想像できない・・・・・・」
「そこから！？」
完全に怠け者を見る眼だよねそれ！？まぁ否定はしないけどさ！
「要するに、一人でやるゲームじゃねえってことだ」
「そっか。それで皆でうちにきてゲームする・・・ってどういうことよ！？」
一葉は本題を思い出したように眼を剥く。
「つまり・・・そういうことなんだよ」
「悟ったように言うなっ！」
腕を組み、斜めに構えて答える俺に、一葉が得意のチョップを喰ら

わせてくる。馬場さんも顔負けだよ。
「うーん、でもどうしよう・・・。皆で楽しくゲームもしたいし・・・かといって同居がバレるわけにも・・・」
一葉はＷｅｅへの好奇心と同居バレの恐怖心とで板挟みになって悩んでいる。
「もうあいつらには言ってもいいんじゃねえの？」
「ダメだって。言ったら絶対にまた葵が心配するもん。ていうかだから前もこれで悩んだんじゃない」
「それもそうだな・・・」
二人大きく溜め息をついて、テーブルに頬杖をつく。一葉はボーっと考えているようで、目線は明らかにさっきから出しっぱなしのＷｅｅに向かっている。二葉と三葉に眼をやると、いつの間にかぽかぽかと小突き合いを始めている。何やら好きなキャラクターで揉めているようだ。
もう何年も前からずっと一緒に住んでいたかのような安心感を感じながら、俺は一つ小さく息をはいて、夕飯の支度をするべく立ち上がった。
今日の夕食当番は俺だ。本来今日の朝食当番が俺だったのだが、目覚まし時計が突然の辞職の意を示しやがったために、急遽交代となった。
今晩は金目鯛の煮魚に、肉詰めオムレツで固めようと考えている。金目鯛は刺身のままでも旨いし、酒蒸し、粕漬にしても大変美味だ。通年脂がのっていて、重宝してい――――、

ピンポーン

俺が調理しながら気持ち良く心の中で金目鯛の紹介をしていると、家のチャイムが鳴らされる。
「あ、はいはーい！・・・悪いヒトハ、ちょっと今手が離せなくて・・・・・。代わりに出てくれ」

「うん、誰だろ」
「この時間なら、おばちゃんだな。またおすそ分け持ってきてくれたのかも」
おすそ分けと聞いた途端、アニメも終わってごろごろしていた二葉が敵を察知したプレリードック並の速さで顔を上げる。
「おすそわけ！！にくじゃがか！？なんたらごぼーか！？なんとかぜんにか！？」
今にもよだれが出そうな表情で、来客者に顔を出そうと玄関に向かう一葉の後についていく。その様子を呆れたように眺める三葉。もう何度も見た光景だ。
「はーい、今でまーす」
そう声をかけて一葉がドアを開いた。と、同時にごつんと鈍い音がしたと思えばからんからんと均等な軽い音を奏で始めた。
「あ！あ～～～～！！！勿体ないぞ～！？」
二葉がその様子を見てなのか何やら叫んでいる。
「あ、あ、あ、あ、し、し、し、しつれいしやしたぁぁぁ！」
「ええ！？」
一葉の驚く声も余所に、こちらからは見えないが、どうやら来客者は口どもりながら謝り、と思えば走り去って行ったようで、どたどたと2階の廊下を音を立てて駆けていった。
ようやく手の空いた俺は、事件の起こった玄関先まで向かう。
「な、なんだ誰？」
「わかんないけど・・・学ラン着た男の子・・・」
一葉の証言を聞き、俺の中で嫌な予感が沸々と沸き上がってきた。
「そ、そいつが何しに・・・？」
「なんか筑前煮を持ってきてくれたんだけど、お皿ごと落としちゃって・・・・・・ってまさか・・・？」
一葉も答えに辿りついたように口を開く。
そう、以前大屋のおばちゃんに一葉をこのアパートに住まわせてやってくれないかという旨を頼みにいった時に、ちょろっと話に出た

おばちゃんの一人息子の雄太(ゆうた)である。
何故わかるのか、理由は簡単だ。今まさに玄関に横たわっている皿はおばちゃんがうちにおすそ分けを持ってきてくれるときのプラスチック皿と同じ。そしてそんなおすそ分けを持ってきてくれるのはおばちゃんしかいない。そのおばちゃんが来れず、代わりに派遣されたヤツが学ラン姿なら間違いなく雄太だろう。
それにしても、あの様子だとどうやらおばちゃんから話を聞いていなかったらしいな。もう2ヶ月も経つというのに。
「あ～あ～俺達の靴にも飛び散ってるじゃねえか」
玄関という国に爆弾を投下していった雄太のせいで、靴という国民が多大な犠牲を払っている。こりゃ片付けが大変だ。
「きょうはもうなんとかぜんになしか！？がーん！」
二葉が人生の終わりを迎えたようにひざまずいて頭を抱えている。
「くっそ～！あのハゲゆるさないぞ～！わたしの大事ななんとかぜんにを～！」
雄太はハゲてないし、大事なのに筑前煮の名前を言えていないし。
二葉が盟友の敵(かたき)を打つように立ち上がろうとすると、再びチャイムが鳴る。
多分おばちゃんに事情を聞いて再びおすそ分けを持ってきてくれたのだろう。
「・・・おーい雄太～。開いてるぞ～」
俺が平坦に外の雄太を呼んでやると、申し訳なさそうに扉が開いた。
「・・・・・・」
「久しぶりだな雄太。もう零すなよ」
どうやら再びおすそ分けを持ってきてくれたらしく、先ほどとは違う皿に入れて持っている。今度は陶器のようなので、落としたら大惨事だ。
雄太は今年から花岡中にあがった中学生一年。中一にしてはかなり高身長であり、高校で中背の俺とほとんど変わらない。短髪のトップをワックスで下手に固めていて、頬にはかなりのニキビがある。

着ている学ランをだらし無く開けており、どうやら中学に上がって妙に色気づいたようだ。そして何よりもこいつは・・・、
「ハ、ハル兄(にい)・・・。いつ結婚したんだよ！？」
「お前はおばちゃんから何を吹き込まれた！？」
おばちゃんんん！？ちょっと最近本当に悪魔じみてるよね！？
「だって母ちゃんが『あの二人は夫婦みたいだよね～うふふ～』なんて言ってたんだよ！？」
何ゆうてはるんですかあのお方は！？紛らわしすぎるよ！？
母親も母親なら子も子だよ！
そうだよ、こいつはとんでもなくアホなヤツだったよ！
歳を重ねていない分、筑紫よりアホだと言えよう。
怒っていないかと一葉の表情を伺うと、やはり俯いて顔を真っ赤に染めている。
この類の話を持ち掛けられると、毎回こうなんだよな。
「ちょっとまて雄太！とりあえずあがってけ！説明するから」
「ダメだよハル兄！そんな二人の愛の巣に上がってしまうなんて俺にはできない！」
ダメだ、話が通じねー！

◇◇◇

雄太を家に引きずり込むまでに5分を要し、ようやくお茶を出すところまでこぎつけた。
「・・・ハル兄・・・・・・。もう子供いるの・・・？」
「お前はそのはやとちりの性格をどうにかしろ！？」
二葉と三葉を交互に見ながら、驚きすぎて大声も出せないといった様子。一体どうすればあのおばちゃんののほほんとした遺伝子からこれが生成されちゃうのだろうか。

そんなことを考え大きく溜め息をつく。仕方がないので不思議そうに眉を潜める雄太に、この2ヶ月間の日々の事を話してやることにした。雄太と学校が被るやつはいないし、おばちゃんの息子だから大丈夫だろうということからだ。というかこのまま放っておいたらあることないこと近所で言い触らしそうな勘違いようだったからな。

「な・・・なるほど・・・」
「わかってくれたか雄太」
「それで今付き合ってるってことかハル兄！」
こいつに期待した俺がアホだった。
ほらほら、一葉も切れる寸前だろうが。
「わかったわかったもうそれでいいから、とりあえずこのことは誰にも言うなよ？」
「おうよ！俺はこれでも口は鉄ぐらい堅いから！」
それあまり堅くないよね。せめて嘘でもダイヤモンドと言って欲しいよ。胸をどんと拳で叩いて、簡単に滑りそうな口を尖らせる。
「それでさ、ハル兄」
「・・・なんだ」
もうあまり話さないでくれないかな。
俺は喋り疲れて多少不機嫌を顔に出し、頬杖をつきながら睨む。
「少し・・・二葉さんと話をさせてくれないかな？」
「フタバと？」
何故と口を開く前に雄太はさらに口を開く。
「お、俺、さっき玄関先で『勿体ない』って言われた時の二葉さんに惚れちまったみたいなんだ！」
「そうか・・・・・・ってえええええ！？」
薮から棒に何言い出してんだこいつ！？っていうか惚れるポイントが斬新だな！？
雄太は耳まで真っ赤にして、でかい図体に似合わない表情をしている。

「なななななんでなんで！？」
先ほどまで俯き聞いていた一葉も、あまりの仰天発言に言葉を発せずにはいられない。
「さっきからハル兄と話してても二葉さんにしか目が行かないんだ・・・。ハル兄の普通でつまらない顔になんてさっきから一瞬たりともいかないよ」
雄太後で覚えとけよ。まぁ普通ってところはいいんだが。
「・・・それで、フタバとちょっくら話がしたいと？」
「できればたくさんしたいけど」
図々しいな。
「ど、どうするヒトハ？この手の話はフタバにはまだ早いんじゃないか？」
俺は一応姉妹の長である一葉に尋ねる。すると一葉は急にクスッと笑いながら答える。
「べ、別にいいんじゃない？話をするぐらい・・・ふふ」
「でもなぁ・・・ってなぜ笑う？」
なにやらかなり可笑しそうに口元を押さえながら笑うのを堪えている。
「だ、だって・・・、ハルキの発言が頑固親父みたいなんだもん」
「う、うるさいな！ま、まぁヒトハがいいって言うんならいいんじゃないか！？」
顔が赤くなるのがわかる。一葉は俺のこの言葉もツボに入ったようで腹を押さえて声にもならない笑いに満たされている。
もう一葉は無視して、一葉達の部屋で三葉と遊ばせていた二葉を呼びに向かう。
「おーいフタバ、雄太のやつがおまえとお話したいってよ？」
「ゆうたってだれ？」
「ああ、さっき筑前煮持ってきてくれたやつだよ」
二葉は顔と名前が一致したようで、急に苦虫を噛んだような表情に変わる。

「あいつかー！オオヤのぜんにをめちゃくちゃにしたあいつかー！」
「そう、そのあいつだ」
いきなり好感度最悪な二葉は立ち上がり、右の拳を高々とあげて、
「はなしあいをよーきゅーするっ！」
と叫んだ。確かさっきのアニメの台詞だなそれ。
その様子を三葉が頬を染めながら見ている。
え、何三葉もやりたいのかこれ？
「よし！しゅつげ～き！」
話し合いを要求しといて、ものの一秒で出撃宣言を出した二葉は、勢いよく部屋から飛び出した。取り残された三葉と目が合う。三葉も来るかと目で問うと、コクリと言葉なく頷いて、俺の手を取ってきた。最近は何をするにもべったりくっついてくる三葉である。
三葉の手を引きながら居間へ向かうと雄太と二葉がテーブルを挟んで正座で向かい合っている。そして将棋の対局時で言えば、一葉はタイムキーパーの位置だ。雄太は額に汗を滲ませながらきょろきょろと目を泳がせ緊張した面持ち。二葉もまた険しい表情ながら、緊張とは違い、何やら可愛い顔で口を尖らせながら睨んでいる。この図だけ見れば蛇に睨まれた蛙の図。ただ蛇側があまりに可愛らしいので、この言葉は似合わない。そして真ん中で戦況を見つめている一葉は、どうしていいかわからずに二人を交互に見ながらおろおろしている。蚊帳の外である。
そんな途中参戦はしにくい状況ながらも、俺と三葉は一葉の向かいに腰を下ろす。どうやらそれを皮切りに筑前煮と恋心を巡る正義と悪の熱い戦いの火蓋が切って落とされたようだ！ってなんじゃそりゃ。
「ふ、二葉さん！」
口火を切ったのは雄太だ。定まらなかった目を二葉に向ける。
「なんじゃ！」
二葉も交戦の構えだ。腕を組みながらつんっと上から覗き込むように見る。よし、可愛いぞ二葉。

「あの・・・ご趣味は・・・？」
まるで初々しいお見合いのような質問で攻撃に出る雄太。緊張のし過ぎで照準が上手く定まっていないようだ。
「食べることじゃ！なのに先ほどどなたかがわたしの前でぜんにを落としたようじゃが？」
どこぞの将軍のように話す二葉。鋭いカウンター攻撃を喰らった雄太は肩をびくつかせる。
「あ、あれはちょっとした事故でですね、二葉さんのためなら毎日でも作って持ってきたいと考えている所存であります！」
慌てて将軍に深々と頭を下げる雄太。どこでそんな言い回し覚えたんだよ。ていうか作ってるのはおばちゃんだよ。
「え！？毎日！？それはちょっと参っちゃうな～」
自分の後頭部を撫でながら、夢のような提案に頬を綻ばせる二葉。現在二葉の頭の上では筑前煮のソファーに座って高笑いをしている姿が浮かんでいる筈だ。
「そ、それでですね・・・。二葉さんにこの場を借りて言いたいことがあります・・・」
どれでなのかはわからないが、雄太はここでリーサルウェポンを放つことに決めたようだ。雄太のこれでもかという程に赤い顔がそれを物語っている。それを感じてか、向かいの一葉もそんな雄太を期待の眼差しで見つめながら、ほんのり頬を赤く染める。隣の三葉の唾を飲み込む音が聞こえる。俺もなにやら緊張してきたぞ。
緊張を解(ほぐ)すために俺は先ほど用意してあった冷えたお茶に手をつける。
「なんじゃ！」
「結婚を前提にお付き合いしてください！！！」
俺は口に含んでいたお茶を盛大に吹き出した。雄太に。
「あ！？汚っ！なにすんのハル兄！？」
「いきなりすぎるだろ！？まだボーイミートガールして３０分も経ってないよ！？」

思わず発音の悪い英語で表しちゃうほどに動揺したわ！？一葉も向かいでちょっと可笑そうに口元を押さえる。三葉は何故か頬を染めて固まっている。
「俺はてっきり友達になってくれとかそんな感じかと思ってたよ・・・。遊びに行くとかさ・・・」
ほらみろ、あまりに突然すぎる告白に二葉は口をぽかーっと開けて呆然としているじゃないか。
「そ、そっか。えと、じゃあ二葉さん！俺と友達になってください！」
雄太の言い直しにはっと気づいた二葉は、
「え～・・・どうしよっかな～・・・」
と何やら満更でもなさそうに雄太から目を逸らしてもじもじしている。先ほどの将軍が嘘のようだ。というかこんなしおらしい二葉は貴重だ。
「そうだ二葉さん！今週の土曜日、遊園地に行きましょう！！」
「え！？遊園地！？」
雄太の提案に二葉はまたも心を揺さぶられ、テーブルに手をついて身を乗り出す。
そして何故かちらりと俺を横目で見る。
「・・・行ってきたらいいんじゃないか？」
遊園地と聞いてあまりに嬉しそうな顔を見てしまったため、雄太と二人きりっていうのはあれだが、否定するのも憚られたため渋々了承してやる。
「・・・・・・・・・みんなも一緒がいい」
二葉が視線を落としながら、口を尖らせる。
「・・・おし！じゃあ土曜日皆で行くか！」
「ほんと！？」
二葉がきらきらとした眼を向ける。
「いいね、そのほうが雄太くんもフタバと友達になりやすいんじゃないかな」

一葉も胸の前で手を合わせて嬉しそうに笑う。
「・・・・・・遊園地かぁ・・・」
三葉も頬をばら色に塗って、頬を綻ばせる。
「雄太もそれでいいか？」
「もちろん！二葉さんと一緒ならたとえ火の中水の中だよ！」
そりゃ俺らを火に例えてるのかい？
「やったぁ！ゆうえんちだー！」
うさぎのようにと跳びはねて、満面の笑みを振り撒いている二葉。
それからはっとして雄太に向き直る。
「おぬし！なかなかいいやつじゃ！！」
びしっと雄太を指さして、悪戯な表情を向ける二葉。雄太は二葉の人差し指から出される見えない光線で撃ち抜かれるように、後ろに倒れた。
そんな様子を皆一緒に笑いあった。夕飯の用意は捗らなかったが、これこそこの言葉で締めてもいいだろう。
「まぁいいか」
俺は小さく一息ついてそう呟いた。

雄太はいい返事を貰い、意気揚々と去って行った。
「雄太くん、男らしかったね」
一葉が調理している俺の後ろから声をかける。
「あいつは何も考えてないだけだろ」
「でもしっかりフタバの心を掴んでいったよ？その辺り、どう思われますかお父さん？」
その言葉に、両手で頬杖をつきながら悪戯に笑っている。
「・・・別にどうも思わねえよ」
少し不機嫌に見せてやると、一葉独自の解釈でそれを受け取ったらしく、
「あれ？もしかして妬いてる？」

と更ににやにやと口角を上げる。
「何にだよ」
「雄太くんにフタバをとられちゃいそうなこと？それとも私が雄太くんを男らしいって言ったこと？どっちだろ～な～」
一葉はこちらに近づいてきて、俺の心の中を覗き込むように見つめてくる。俺の心臓が驚いたように跳ねる。頬が熱を帯びたように熱くなっているのを感じる。
「・・・あれハルキ？なんか私たち重要な何かを忘れてない？」
「・・・へ？な、なんかあったっけ？」
顔を近づけていた一葉は、そのままの状態で唐突に思い出したように話を変える。思わず素っ頓狂な声が出てしまった。
「・・・まぁいっか」
この時は日曜日のゲームパーティーのことなんてすっかり頭の中から抜け落ちていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4267z/

クローバー（２）

2011年12月17日20時47分発行